

花で町を彩る復興から観光客のおもてなしへ広がる地域の強い絆

特別賞 協会会長賞 和歌山県 田辺市立本宮中学校

緑濃い山々がつらなり、日本古来の祈りの文化が息づく熊野本宮。世界遺産に登録された「熊野本宮大社」や「熊野古道」には現在、世界中から多くの観光客が訪れる。そんな奥深い山の間には幾筋もの川が流れており、たびたび氾濫を繰り返してきた。2011年の「紀伊半島大水害」では、記録的な豪雨により町が甚大な被害を受け、尊い命や多くの家屋が奪われた。元気がなくなり沈んだ地域を少しでも明るくしたいと立ち上がったのが、当時の中学生たちだ。季節の花を植えたプランターを、町の見抜き通りや施設などに設置。住民の家にも配り続ける生徒の生き生きとした姿は地域の励みとなり、泥だらけの町が花で彩られ、徐々に明るさを取り戻していった。それから10年以上が経過し、「復興」を果たした現在は、国内外から訪れる観光客に向けた「おもてなし」を目的とした活動に深化。道端のポイ捨てごみを回収しながらたくさんのプランターの花でおもてなしする精神は、世界遺産をふたつ抱える環境を生かした世界遺産学習でも発揮される。

熊野古道では損傷が著しい箇所を修復する「道普請（みちぶしん）」を実施。階段状に木組みを設けたり、土を補充したりと大変な作業だが、観光客に安全に歩いてもらおうと生徒は裏方として支える。一方で、自分たちの町の魅力をアピールするために、地域の顔として「語り部」にも挑戦。世界遺産センターや熊野本宮大社、熊野古道などを訪れる観光客に話しかけ、海外からの観光客とは英語で交流しながら学んだことを披露している。いずれの取り組みも地域の協力が不可欠で、いろんな活動に関わる住民の羽根千恵子さんは、「こうした体験学習を通じて地域の魅力に気付いてもらい、いったん社会に出てからも本宮に帰ってきてくれたらうれしい」と期待を寄せる。世界遺産登録20周年の節目に当たる本年度、熊野本宮大社で記念シンポジウムが開催された。出席した生徒がこんなスピーチをし、来場者の胸を打った。

「本宮の人たちには優しさがあり、その優しい人たちが私は大好きです。そんな町を支えていける人に私はなりたい」。かつて被災した地域を花いっぱい元気づけた生徒の思いを受け継ぎながら、年々強くなる住民との絆を糧に、ふるさとへの誇りを胸に刻んでいる。



和歌山県 田辺市立本宮（ほんぐう）中学校

学校長：工藤 英樹（くどう ひでき）

生徒数：44名（2024年11月末現在）

住所：和歌山県田辺市本宮町本宮 730

電話：0735-42-0273

アクセス：「南紀白浜空港」から車で約80分

上：住民の指導を得てプランターに花植えをする生徒たち、2左：熊野古道の修復用に重たい土を担いで運ぶ、2右：木枠を階段状に設置する道普請、3左：海外の観光客と交流しておもてなし、3右：花植えプランターを置く前に道端を清掃する様子、下：シンポジウムなどで地域の歴史や魅力を英語で語って広く発信する